眠る前と同じように、俺の腕には点滴のチューブが刺さっている。

チューブがつながった先の袋に入っていた緑色の液体は、だいぶ量が減っていた。なくなった分は、すべて俺の体に吸収されたのだろう。

「うふふ……とても良い状態になってきているわね……」

「そうですか……？」

「ええ、とっても。あなたは今、体のどの部分も、ほとんど動かせないでしょう？」

奏さんに言われたとおり、どう力を込めても指一つ動かせない状態になっていた。

きっと俺は全身にこのくらいの麻酔をかけないと、痛みで気が狂ってしまうほどの重傷なんだろう。

……そうなんだろうか？
眠りに落ちる前より具合が悪くなっているような感じだ。どうも、おかしい気がする。
特に、奏さんの様子もなんだか変だ。
横になっている俺を眺めて、だらしなくにやにやと口元を緩めている。
頬が赤く染まり、目つきはどこかとろん、としていた。
「あの……奏さん……？」
「稔さん、あなた……女の人の体は好き？」

奏さんの放った言葉に、俺はたじたじとなってしまう。

一体、どういう意味だろうか？　答えられないでいると、奏さんは俺の身体を、指先でつつ……とゆっくり撫で始める。

「好きよね……？　柔らかくて、温かくて、良い匂いのする、女性の身体……」

「な、なにを……？」

「さっき、わたしに興奮していたでしょう？　わたしにはわかっているのよ、稔さん。ふふっ」

「そんなこと……あっ」

「あら？　変な声、出ちゃってるわよ」

奏さんは、おかしそうに笑いながら、俺の身体を撫で続ける。

その笑みはどこまでも妖艶で、ごくりと唾を飲んでしまう。

指先で触れられるだけで、心地良い感触が、全身に響き渡ってくる。

すごく、気持ちが良い……。

「男の人は本当にだらしないわね……うふふ♥」
奏さんの指が胸から下腹部へと移動していく。
全身のぬくい感覚が、段々と下半身に集まろうとしていた。
肉棒が、勝手に勃起して、はちきれんばかりに大きくなってしまう。
「きっと、ストレスが悪夢につながったのね……わたしが特別な診療で癒やしてあげるわ……」
奏さんは、俺のズボンに手をかける。
「奏さん……？」
頭はひどくぼんやりとしていたけれど、おかしなことをされているのはわかる。
ズボンを押さえようとしても、腕がぴくりとも動かない。
全身が痺れて、一切、抵抗できないのだ。
ズボンが足から引き抜かれて、パンツ一丁の姿にされてしまう。
ちょっと恥ずかしい。出会ったばかりの女性に、こんな姿を見られるなんて。
なんで奏さんはこんなことをするんだろう？

「うふ、パンツの下で、もうこんなに大きくなってる……稔さんの、見せて……」
パンツが引っ張られていく。その手つきはなんだか急いでいて、奏さんも待ちきれないと言った感じだった。
ごそごそと、下半身を細い指が動き回るのは、すごくくすぐったくて、でもビリビリとした快感があった。
いつのまにか、肉棒が完全にいきり立ってしまっているのが見なくても分かる。
強引に脱がされると、ぼろん、と勢いよく跳ね上がった。
「あっ……奏さん」
俺の口からは、情けない声が出てしまう。
すぅっ、と冷たい空気が下半身に当たって、肉棒がぴくぴくと動いてしまう。

「良いモノを持っているじゃない……♥
大きくて、男らしいおち×ぽ……♥」
「か、奏さん……」
「こんなに興奮して大きくなったいいおち×ぽ見せられたら、たっぷり気持ちよくしてあげたくなっちゃう……」
奏さんは、ふいにナース服をはだけ始める。もともと大胆に開いていた胸元を、ゆっくりと見せつけるように露出していった。
前のボタンを外して、綺麗な鎖骨と、黒いブラジャーが露わになる。
さらに、そのブラジャーまでも、自らずらしていき、たゆん……とおっぱいが溢れ出てくる。
たっぷりとした量感のある乳房。乳輪は綺麗な桃色だ。
先端の大ぶりの乳首が、ぷっくりと膨らんでいて、奏さんも発情しているのが丸わかりだった。
どうして、こんなことを……？

俺は混乱しつつも、綺麗なお乳から目が離せなくなっていた。

奏さんが少し動くだけで、ぷるぷると揺れている。指を食い込ませたら、どれだけ良い触り心地だろう。

目の前の素晴らしい女体を好き放題にしたいという欲求がこんこんと湧き上がってくる。

本来ならもっと自分を抑制できていたはずなのに、興奮が収まらないのだ。

エッチなことをしたい、あの胸を揉みしだきたいという欲求で頭がいっぱいになる。

しかし手は痺れて動かず、もどかしい。

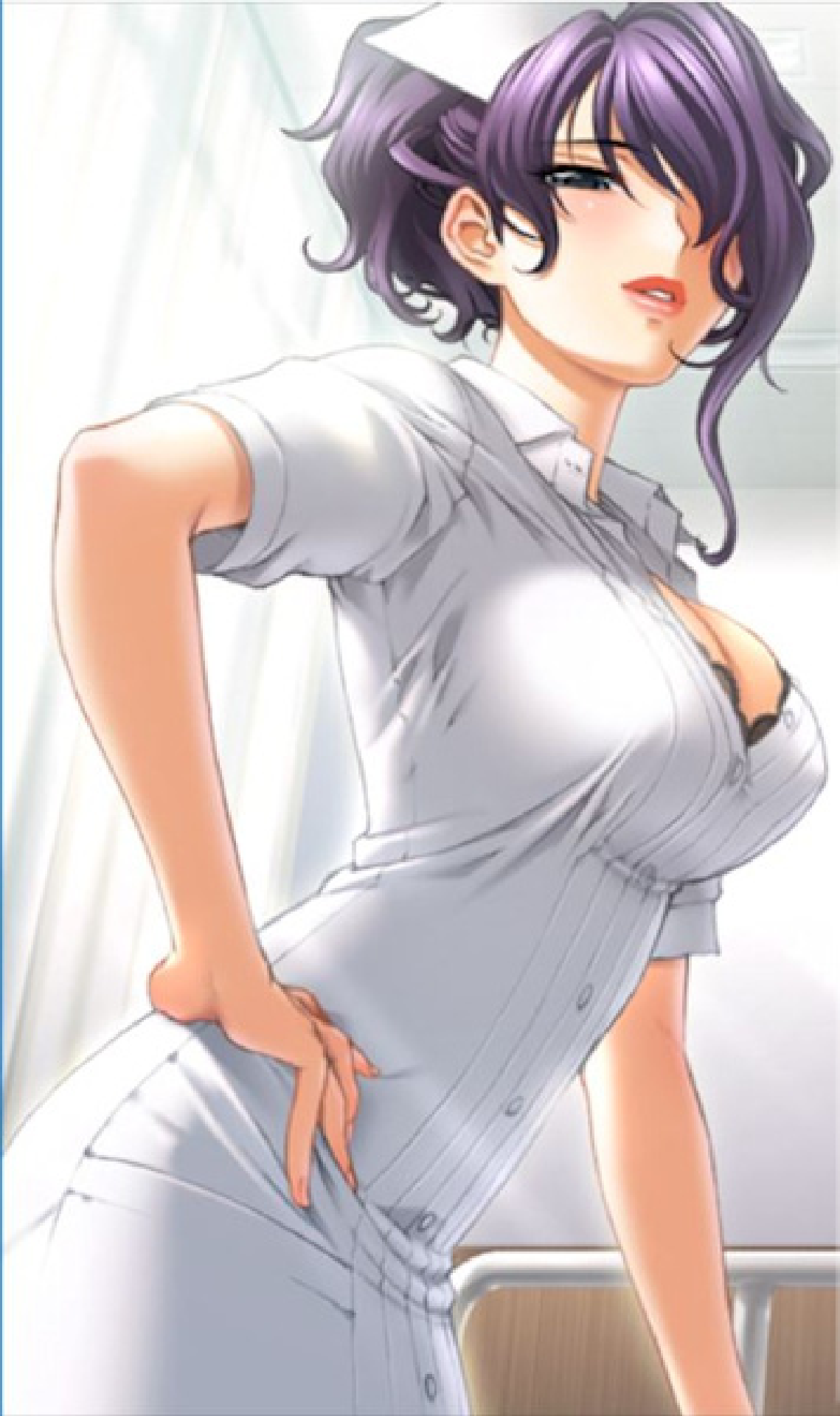
「あら、指をひくひくさせて……おっぱいを揉みたいのね？　うふふ♥　正直でいいわ……わたしのおっぱい、綺麗な形でしょう？　男の人はみんな、わたしの胸が大好きなんだから……」

艶然とした奏さんの口調。

声が心地よく心を撫でていくようだ。

ああ、奏さんにこの欲望をぶつけたい……身体が自由に動けば、すぐにでも押し倒して、犯してやるのに……。

普段の自分なら、獣のように欲望まみれになってしまうことはなかった。
それなのに、こんなにも興奮して我を忘れてしまうのは、奏さんが魅力的だからだろうか。
「おち×ぽな～んにも触ってないのに、先っぽから透明な汁、溢れちゃってるわよ……はやく気持ちよくして欲しくて、たまらないのね♥」
「奏、さん……はぁ、はぁ……」
「そんなに息を荒くして、可愛いんだから……おち×ぽ、しごいて欲しいの？」
「しごいて、欲しい、です……」
「それなら、おねだりしなさい？　ふふっ♥おち×ぽ触ってください、射精させてください、お願いします……ってね」
「奏さん……俺、奏さんのことしか考えられない……俺の節操のないち×ぽ、気持ちよくしてください……っ」
「稔さん、性欲がかなり強いみたい……簡単に言いなりね。これは期待できるわ……うふっ♥いいわよ、い～っぱい、気持ちよくしてあげる」



手でしごいてもらえるのかと思っていたら、奏さんはベッドの上に上がってきて、俺の股を開く。身体に力の入らない俺はされるがままだ。ひたひたと、おっぱいが太ももの内側に当たっている。そして、肉棒にも。これからしてもらえることを想像すると、それだけで興奮が最高潮になる。

ぱいずり。

きっと、奏さんはその極上のおっぱいで、俺の肉棒を慰めてくれるんだ……。

「あなたのココ、わたしの身体の一番柔らか～いところで、しごいてあげるわね♥」
体温を感じるおっぱいの谷間に、我慢汁まみれの肉棒がぴったりと挟まれる。

くちゅっ

たゆん

透明で粘つく液体が、胸の中でくちゅくちゅと音を立てた。
奏さんは胸の両脇に手を当てて、ぎゅ～っと圧をかける。
そして、肉棒を押しつぶすように、おっぱいを擦りつけ始めた。

くちゅ、ふにゅふにゅ……。
女体で一番柔らかい部分の感触は、他では絶対に味わえないものだった。
手つきは、ひどくなまめかしくて、男を喜ばせる方法を熟知しているようだ。

くちゅっ

たゆん

「あぁっ……奏さんっ」
ビリビリと激しい電流のように、一気に快感が流れ込んできた。
思わず、声が漏れてしまうような、たまらない快楽だ。極上の巨乳でぱいずりをしてもらうのが、こんなにも気持ちが良いことだとは思わなかった。

腰が引けそうになっているところを、奏さんは逃がさない。肘を使って俺の足を押さえつけて、ぐにゅぐにゅとおっぱいで俺の肉棒を攻め続ける。体に力が入らない俺は身動きが取れず、ただただおっぱいで気持ちよくなるしかなかった。

「うふふ……♥　気持ちが良いのね……そんな情けない声をあげちゃって、女の子みたい。どんどん気持ちよくなっていいのよ……」

「だ、ダメです、奏さん……こんなの、気持ちよすぎて……」

「おち×ぽビクビクして、もうイっちゃいそうなのかしら。男なんだから、もっと我慢しなさい？　射精するまでずっと、おっぱいをこうやって、ふにゅふにゅ……ってしてあげるから♥」

「く、くぅ……ほ、本当に出ちゃいそうで……っ」

「だーめ。いっぱい我慢した方が、出したときに気持ちよくなれるわよ？」

奏さんは我慢しろと言いつつも、乳房での刺激をさらに強めてくる。

両手で左右のお乳を互い違いに動かして、肉棒を搾りあげてくるのだ。

くちゅっ

たゆん

陰嚢が持ち上がって、絶頂の準備を始める。
「ほぉら、おっぱいをこんなに押しつけられて、おち×ぽ溶けちゃいそうよね……気持ちよすぎてもう何も考えられない、もうイっちゃう、イクイクぅ……って感じでしょう？」
「はぁ、はぁ……奏さん、奏さん……っ」

くちゅっ

たゆん

「女の人の身体のエッチな部分で、こんなにいやらしく擦ってもらって、男冥利に尽きるってところじゃないかしら、うふっ」
「最高です……胸、柔らかくて……すごく気持ちいい……」

「ぬちゅぬちゅいやらしい音立てて、おっぱい奉仕……女の人に、こんなことしてもらったことあるのかしら？　もしかしてばいずりは初体験？」

「はい……」

くちゅっ　たゆん

「とろんとろんの、いいお顔になっているから、きっとそうだと思ったわ♥　覚悟しておきなさい。女の人の胸で、こうやって精子搾り取られるの、一度味わったらやめられなくなっちゃうから……」

「くぅ……奏さんのおっぱい、やばすぎる……」

「仕方ないんだから……もう出しちゃいなさいっ……白くてドロドロな精子、大量にぶちまけてイっちゃいなさい……っ」

もはや一刻の猶予もない。精子が鈴口からわずかに溢れ、肉棒が痙攣し始めている。

「あっ、もう……っ、奏さんっ！」

「イキなさいっ！　イケっ、イケイケっ！」

奏さんはサディスティックな笑みさえ浮かべて、楽しそうに命令してくる。

強い口調で放たれるその言葉と呼応するように肉棒が限界を迎え、熱いものが腰の奥から一気に込み上げてくる……！

びゅるるるっ！　びゅるるっ！　びゅ～っ！

白濁液が、勢いよく迸り、奏さんの顔にまで飛び散っていく。暗い色の髪や、かぶっていたナースキャップにも付着していく。

ドクドク……何度も何度も精液が噴き出し、至高の快楽が繰り返し脳を揺さぶってくる。

気持ちよすぎて、頭が真っ白だ。何も考えられない。

子種汁は奏さんの胸にもたっぷりとぶっかけられ、俺の腹にまでぽたぽたと垂れてくる。

びっくりするくらいの量だ。こんなにもたくさん出たのは、初めてかもしれない。

奏さんも射精の勢いにびっくりしたのか、驚いた表情をしていた。
でも、雄汁塗れにされたことは、ちっとも嫌ではないようだ。
「ずいぶんと気持ちが良かったようね……こんなにたくさん、お汁が……男くさい匂い、取れなくなっちゃうじゃない……♥」

むしろ嬉しそうに、俺の出した精液を指で掬い取り、ねちょねちょ……と指の間に挟んで感触を確かめている。
奏さんは舌をべろぉ……と出して、その精子を舐めとった。おいしそうに指をしゃぶりながら、淫らな熱っぽい口調で言った。

「れろれろおっ……うふ、あなたはやっぱり、んちゅっ……有望ね。これからも、わたしがあなたの看護を担当するわ……明日からも、よろしくね……♥」

クス、クスクス……。

奏さんは嬉しくてたまらないと言った感じで、しばらく笑い続けるのだった。

俺は、ぼおっとして働かない頭でようやく違和感を得ていた。

絶頂したことで肉欲から解放され、思考力をわずかに取り戻していた。

肉棒を楽しそうに胸で挟んで、こんなに精液をかけられても喜んでいるだなんて、普通じゃない。

一体、何が起きているんだ？　俺の担当の看護婦さんが、淫乱だったというだけなのだろうか。